様式２

東京都立大学　学術集会等開催支援　成果報告書

報　告　者 （申請者）	所　　属	人文社会学部・人文学科	職　　名	教　授
	氏　　名	大久保　明男	e-mail	ohkubo●tmu.ac.jp （メールを送信される場合は●を@に変換してください）
学 術 集 会 名	「東アジアの植民主義と文学研究会」2022 年度大会及び「台湾／満洲／朝鮮の植民主義と文化交渉」国際シンポジウム “East-Asia Colonialism and Literature Association” 2022 convention & "The colonialism and cultural interaction among Taiwan, Manchuria and Korea" International Symposium			
開　催　会　場	南大沢キャンパス 5 号館（オンライン同時開催）			
開　催　日　時	2022 年 8 月 16 日-17 日			

開催概要・成果等

１．プログラム・内容

別添資料

２．参加者（参加者数、参加者所属・職位等）

のべ 60 名前後。詳細は別添資料

３．成果

国単位の研究組織の限界を打破するため、日本、中国、韓国、台湾四地域の学者による自主的な研究組織「東アジアの植民主義と文学研究会」が 2005 年に結成され、文学や文化を切口に国際的・分野横断的な研究交流活動を継続的におこなってきました。本組織は「独立、自主、相互理解、民間の立場」という基本原則を堅持し、ゆるやかなつながりを保ちながら、学術交流を通じて相互信頼を培い、また後進の育成にも努めてきました。東アジアの複雑な国際関係のなかで、このような実践や経験は貴重なものであり、今後も継続していく予定です。

この研究集会は年一回、四地域の持ち回りで開催してきましたが、当年度は日本側の主催となり、本校の学術会議開催支援により円満のうちに終了しました。当初、海外研究者の招聘も計画していましたが、コロナウィルスの影響により、海外研究者の来日及び国内参加者の現地参加がほとんど実現できず、約八割方インターネットによる遠隔会議への参加となりました。なお、会議のプログラムなど詳細な資料は別添させていただきます。また、上記のリンクからもご覧いただけます。

本研究会は二十年近い活動実績があり、今後も活動を継続していく予定です。これまで本研究会に関わった各国・地域の研究者は数百名にのぼると見られ、各領域で活躍しています。このような人的ネットワークを引きつづき維持し、ゆるやかに広げていきます。

実施上の課題

1. 日程調整上の難点

新型コロナウィルスの感染拡大により開催日程を見直したり、変更したりする必要に迫られ、日程調整に多大な困難がありました。

2. 旅費支給手続きの簡素化・迅速化

感染症予防のため、日本と台湾双方はビザ取得の制限や入国前の PCR 検査、検査情報の事前登録などなど、通常の渡航より数倍の手続きが必要となりました。幸い国際センターのサポートが受けられ非常に助かりました。しかし一方で、旅費計算や支給の手続は各部局の事務室に委ねられ、職員も教員（会議の主催者）も煩雑な手続きに悩まされました。特に、訪日研究者の旅費・滞在費の申請がかなり事前に出さなければならず、コ

ロナウィルスによる影響を見極めながら準備を進めていましたが、旅費の支給手続きが間に合わないなどの事態も生じました。旅費支給手続きの簡素化・迅速化・柔軟な対応を希望します。

3. 国際会議通訳費報酬の明確化

本学の「専門的知識の提供」の謝金基準に、国際会議の通訳費に関する項目が存在しないことに戸惑いました。これまでも本学で多くの国際会議が開催されたと思いますが、通訳業務に関わる報酬はどのように処理されたのか疑問を感じました。今後も国際会議が多く開催されると思いますが、通訳業務の謝金基準を明確に示してほしいと望みます。